

「2025年度ベトナム国家大学ハノイ校サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学法学部4年 渡辺 日向子

(1) 海外での経験について

想像以上に「当たり前」が異なっていた。道路はバイクで溢れ返り、その隙間を縫うように横断しないといけない。ネイルサロンでは店員さんが足を投げ出してソファに寝転がり、Grabのタクシー運転手はTikTokを片手でスクロールしながら渋滞の中を運転する。日本ではあり得ない光景だが、それで社会はしっかり回っている。海外経験は多い方ではないが、新しい国に行くたびに、社会が機能するためのルールやマナー、しきたり、文化は無数にあることを実感する。ベトナムでも、社会が機能することを妨げない数多くの選択肢を新たに発見でき、毎日がとても刺激的だった。

さらに同じハノイ内でも様々な当たり前があることを目の当たりにした。例えば、ULISでは先生と学生の距離がとても近く、先生のテンションも高い。一方でUSSHでは先生と学生の上下関係がしっかりあり、生徒は先生の飲み物を用意したり、教室の準備をしたりする。最初にULISに行ったのでベトナムではこの距離感が普通なのかと思って驚いていたが、USSHで真逆の光景を見てまた驚かされた。そして、ULISとUSSHの学生も互いの先生との距離感の違いに衝撃を受けているようだった。新しいことを知る時、大きいカテゴリーに当てはめて理解しようとする自分の癖に気がついた。一つ一つ地道に体験し、自分の目で確認していくことが大事なのだと学んだ。

(2) プログラム内容について

共同発表では、現地の学生が共に作業を進める中で新たに気づいたことを共有してくださり、それがきっかけとなって具体的にテーマを絞ることができた。アンケートについても、「日越の違いを知った時に私たちが受けた衝撃をみんなに共有したい!」という思いで設問を工夫したのだが、想像以上に日越で異なった結果が得られ、大きな喜びを感じた。そして中国人メンバーが一人で30人を超える回答者を集めてくれたおかげで、中国のデータも加えることができた。日越とはまた異なる傾向の回答が多く寄せられ、良い味を出すことができたと思う。一方で難しかったのは、役割分担だ。テーマ決めが遅れたために具体的な作業について話し合う時間が不足した上、現地学生の忙しさや関心度を把握できないまま、直前になって作業を振り分けることになってしまった。ベトナムの学生たちの得意分野を早めに把握し、信頼して任せる姿勢が必要だったと反省している。

現地実習では、一週目はチャンアン、二週目はドウオンラム村となかなか個人旅行ではいけないような場所を案内してもらい、終始ワクワクが止まらなかった。車の中でみんなで大騒ぎしながら移動して、現地について事前に調べてくれたベトナムの学生さんたちにあれこれ説明してもらって、目の前で作られたサトウキビジュースを恐る恐る飲んで、、、と全てがとても濃密な時間で、忘れがたい大事な思い出になった。

(3) 進路への影響

現在4年生で今年度末での卒業が決定しているため、長期の海外留学の機会はない。しかし、就職先の職場は様々な国籍の人と関わるのが当たり前の環境にあり、海外への出張や駐在も経験できると聞いている。今回のプログラム参加を通して、そうした海外での経験に積極的に挑戦したいという気持ちがさらに強くなった。

(4) まとめ、学習成果(自分の中の変化)

最後に、このプログラムを通じて一番深く考えさせられたことについて書き留めたい。日本では、高いQOLや快適な暮らしを求める価値観のもとで、様々なサービスが提供され、商品が開発されている。私も振り返ってみれば、そのような価値観を当然のように持ち、時には人に押し付けてきた。しかし、ベトナムでの2週間は、快適で清潔な環境に慣れすぎることが、逆に適応力を奪うことになるのではないかと気づかせてくれた。例えば災害が起きて普段の衛生面が確保できないとき、適応力は生死を分ける問題になる。そこまで深刻な状況にならないとしても、快適さや清潔さといったフィルターによって色々なものをかなり手前の段階で排除してしまっていたのではないかと考えるようになった。清潔であることや秩序立っていることは、人生の豊かさや社会での生きやすさとは比例していない。自分が無意識に許容できるレベルを少し下げただけで、見える世界が広がり、より多くのことを経験できるのではないだろうか。もちろん、最低限の衛生環境や礼儀は必要だ。し

＜事務局使用欄＞受付番号：

-

かしこれからは、身体能力的にも精神的にも、神経質になりすぎずにもっとおおらかに、柔軟性や適応力を持って日々を過ごしていきたい。